

EL PRIMERO 誕生 50 周年

50 年の成功を振り返って

第 3 章：

1980 年 - 1989 年：復活

El Primero 復活のエピソードはあまりにも素晴らしく、作り話かと思われるかもしれません。確かに奇跡ともいえるこのストーリーは、1 人の英雄から、逆境、不当な決定、不服従、正義、正しい判断、ハッピーエンドまで、伝説の要素がすべてそろった真実の物語です。

1976 年、マニュファクチュール第 4 工場の責任者、Charles Vermot (シャルル・ベルモ) は、El Primero キャリバーの製造に使われる工具類を隠そうと決めたとき、驚くべき勇気と洞察力を見せたといえるでしょう。彼は、1991 年に RTS スイス国営テレビ放送で、「いつか必ずこのクロノグラフの生産が再開するだろうという確信と、これに命を懸けてもいいという覚悟があったのでしょうか」と語りました。彼が工具類を隠した有名な屋根裏部屋を訪れる機会があったら、そうした彼の直観と確信の強さを感じていただけるかもしれません。この場所は当時の状態のまま残されており、棚の上にあるのは、大部分が歴史的キャリバーです。150 を超えるプレス機はもうここにはありません。ほぼ 10 年間忘れ去られた後、これらの工具は再び日の目を見ることができました。

1978 年、ゼニス Dixi 社に買収されたことで存続を許されたとはいえ、それまでとは様相が変わったことも事実です。時計ブランドと同時に、一部の大手ブランドのためのムーブメント生産を引き受けるようになったからです。そのうちの 2 社、エベルとロレックスは、マニュファクチュールの復活に決定的な役割を果たしました。クォーツが台頭する中で、Swatch の大々的な発表があったにもかかわらず、エベルの社長 Pierre-Alain Blum (ピエール＝アラン・ブルム) が、1981 年の同社のカタログに優れたムーブメントを搭載した自動巻クロノグラフを掲載しようとしたのです。こうして、彼はゼニスから、El Primero キャリバーの在庫の一部を買い上げました。それでも、ゼニスがこのキャリバーの生産再開に踏み切るにはまだ足りません。この流行がこれからも続くなど、いったい誰が言えたでしょう？

そこへ現れたのがロレックスでした。王冠のロゴで有名なこのブランドは、自動巻クロノグラフが再び脚光を浴びることを確信していました。そこで、同社の Daytona モデルを一新して El Primero キャリバーを収めようとしたのです。El Primero キャリバーは信頼性の高い市場で最も優れた自動巻クロノグラフキャリバーでした。その上、3 時、6 時、9 時位置のカウンター配置がこのモデルの文字盤にぴったりだったようです。高振動はどうするか疑問はありましたが、ロレックスが使用するムーブメントの標準仕様であった 4Hz、つまり通常の毎時 28,800 回振動に下げることによって解決できます。こうして、ゼニスとの話し合いが始まりました。

それでも、問題がひとつありました。ロレックスは信頼性の高いムーブメントを大量に必要としています。しかし、1984 年当時は、プレス機 1 台が 4 万スイスフランもするうえ、El Primero キャリバー 1 個の生産に 150 フラン以上かかり、およそ 700 万スイスフランが必要です。ゼニスにそれほどの額を投資する余裕はありません。そのときになって、Charles Vermot (シャルル・ベルモ) が機械や工具類の処分に反対したことが思い出されまし



た。彼が工具類を救おうとしていたとき、同僚の中には、このキャリバーやブランドの時計作りの伝統にこだわる彼をからかう者もいました。ようやく、彼の行為が急場を救うばかりか、それ以上の効果をもたらすときが来たのです…。

エンジニアはこの「救世主」のところにきて、隠していた工具類を出すように頼みました。謙虚に、しかし頑固に自らの信念を貫いたヒーローは、感極まる思いでした。思い描いていたことが本当になったのです。彼は、屋根裏部屋に隠す各部品、各工具にラベルを貼り、リストを作成していました。いつでも再開できるように、製造工程もファイルに書き写してありました。当時の技術部長、Jean-Pierre Gerber（ジャン＝ピエール・ジェルベ）は、「ミスター・ベルモがリストやファイルを作り、保管してくれたおかげで、すぐに生産を開始することができました」と述べています。

その功績を賞し、Charles Vermot（シャルル・ベルモ）には、El Primero クロノグラフと「すばらしいディナー」への招待状、特別旅行が贈られました。こうして、再び El Primero キャリバーの生産が始まり、ロレックスとの 10 年契約が結ばれました。1988 年に再生産ムーブメントの最初のシリーズが納品され、ゼニスのムーブメントを搭載した初の Daytona ウォッチが同年のバーゼルフェアで発表されました。

また、マニュファクチュールに吹く追い風が、どうやら大海原に乗り出したいという意欲を与えたようです。他社用のキャリバーの生産と並行して、ゼニスでは自社製品のクロノグラフに搭載する自社キャリバーの生産も再開し、マニュファクチュールとしての復帰を果たしたのです。

とはいえ、ノウハウを持っていても、人々がその事実を知り、製品に買い手が見つからなければ何の役にも立ちません。1920 年、ゼニスはその名にふさわしく、世界中で自社ウォッチを販売していました。クォーツショックで、その名は一見忘れ去られたかのように見えました…。スイス時計産業の第一線に復活したマニュファクチュール。それは、ブランドイメージを完全に建て直し、力強い画期的なデザインを通して存在し続けること、再び脚光を浴びることを意味していました。